

## ブウシヨ 『ナポレオン宮廷での装い』

講師(西洋服装史担当) 斎藤多香子

ヨーロッパ諸国のなかでも、フランスは服飾に関する研究文献が豊富であるが、フランス大革命前後の1780年代から1820年頃にかけての研究や文献は少ない。しかし、1789年の大革命を契機にフランス服飾は大きな展開を見せ、その変化は、現代の服飾にも多大な影響を及ぼしている。したがって、この年代はフランス服飾史の中でも本当に興味つきぬ年代と考えられる。今回は、この時期の一人のモード商人が残した史料に基づいて書き起こされた一文献を取りあげたい。『ナポレオン宮廷での装い：貴夫人たちのお洒落と政治、未刊行史料による』 *La toilette à la cour de Napoléon; chiffons et politique de grandes dames d'après des documents inédits* (1810~1815). Paris, Librairie illustrée, 1895. [384.6 B] である。

著者のブウシヨ (Bouchot, Henri François Xavier Marie) は、パリ古文書学校を卒業し、パリ国立図書館の司書をつとめた。ヒラーの文献目録によると1892年から1898年にかけて、5冊の著書を残している。本館にはそのうちの3冊が所蔵されていて、ちなみに他の2冊も挙げておくと、『国立図書館版画室ガイドブック』 *Le cabinet des estampes de Bibliothèque Nationale*. Paris, E. Dentu [1895] [K730.3 B] と『フランス軍服の栄光』 *L'épopée du costume militaire français*. Paris, Société Française d' Editions d' Art [1898] [390. 9 B] である。

さて、この『ナポレオン宮廷での装い』は、当時リシュリユー通りに店を構えていた宮廷御用商人であったルロワ(Leroy)の店の請求書を史料として書かれたものである。本文は7章から成り、モードの大仕掛け人ルロワ(1章)、皇女たちの布地

(2章)、元師夫人と貴夫人(3章)、1814年の服飾小物と政治政策(4章)、100日天下のモード(5章)、皇帝の女性たちへの贈り物(6章)、マリー・ルイーズとプルドン(7章)という内容である。巻末には顧客であった、ジョセフィーヌ皇妃、マリー・ルイーズ皇妃、オルテンス王妃、バサノ公爵夫人、帝室劇場の女優クロチルド嬢など12人の女性の請求書と、この店の顧客リストが付されている。1811年から1815年にかけてのこのリストには、400人にのぼる名前が記され、タレーラン夫人などの名



バサノ公爵夫人 1812年  
花刺繡のある濃いビロードの舞踏会用ローブ

も散見される。ところで、このルロワ<sup>\*</sup>という人物は、本書によると、まだデザイナーという仕事が明確に専門化していないこの当時、オペラ座で衣装デザインの仕事をしていたガルヌレ(Auguste Garneray 1785~1824) という男に服のデザインを依頼する。このガルヌレは美術館で毎日彫刻の模写をして、直接布地を扱うことなく服を描きだしたらしい。そして、彼のデザインは、ルロワによって服に仕立てられ、ジョセフィーヌや他の宮廷の女性たちを飾り、このような女性の姿は、『ジュルナル・デ・ダーム・エ・デ・モード誌』*Journal des dames et des modes 1797-1838*. Paris, Francfort sur le Mein [383. 135-J] に載せられて、ヨーロッパ中に広まっていった。著者のブウシヨによれば、ナポレオン時代のモードには二つの流れがあった。1つは「画家ダヴィッドが無謀にも投げ放った古色蒼然とした趣味の流れ」で、もう1つは「ルロワとガルヌレの2人がつくりだした、優しい女性的で、しかも近代的な好みの流れ」であると説明している。

付録の巻末の請求書は、本書のなかでも特に史料を読む楽しさが味わえる部分である。たとえば、ジョセフィーヌは、1812年12月には、151,200 フランの付けが残っており、これは1813年のうちに4回に分けて支払われる予定であったが、実際には、96,611フラン43サンチームしか支払われなかったこと、しかし、1813年にはさらに、114,841フラン66サンチームの買い物があったことが記されている。また当時、宮廷で極めてエレガントな女性として名高かったパサノ公爵夫人の請求書には、服飾に関する細かい記述が見いだされる。

1812年2月 チュールのローブ仕立て代、  
但し、細かい目のチュール、絹刺繍、  
白ナデシコの花綱飾り、サテン縁取り、  
下に着るローブ仕立て代を含む  
- 500フラン

髪飾りと花束 - 54フラン  
バラの蕾の花束 - 15フラン  
白サテン亜麻レースのボネ  
- 72フラン  
銀水玉チュールのローブ仕立て直し  
代・百合の花とトルコ銀のステッチ  
- 10フラン  
10フランの百合の花束12束  
- 120フラン  
10フランの髪飾り用小ブーケ3つ  
- 30フラン  
別に大きなブーケ - 24フラン

ローブ1枚仕立てるために用いられたさまざまな装飾品や髪飾りの品々を、まのあたりに見る思いがする。それにしても、彼女はなんと多くの花を注文していることだろう。また、当時の貴夫人用のローブの1枚の値段も布地代と仕立て代から計算することも可能である。さらに、この店ではクリーニングや仕立て直しを引きうけていたこともわかり、まだ今日のデパートのような流通組織がなかった当時の社会状況を考えると興味深いものがある。布地の種類のみならず、ローブの種類もこれらの請求書から読み取っていくこともできる。但し、ブウシヨは請求書に載せるにあたって、かなり取舍選択をしているので、より正確に言えば、この文献は原史料のインデックスとでもいうべきものであろう。

ともあれ、当時、趣味の良さを競った女性たちが、どのような素材の、どのような装飾のほどこされた衣装を着ていたかを知るうえでは、極めて貴重な文献であることは疑いえない。

\*Leroy については、M. Contini: *Fashion*, London, Hamlyn, 1965. [383.1-C] P.223参照。